

5.24 源三位頼政

先日の源頼政の話（四季…五月雨「いずれ菖蒲とひきぞわずらふ」参照。）について、ある方から源頼政が「源三位」といわれている理由となぜ反乱を起こしたのかと聞かれました。

源頼政は、平家物語の中では、「源三位(げんざんみ)頼政」或いは「源三位入道」と呼ばれることが多いのですが、これは、彼が、源氏の武家として、はじめて従三位の地位まで上り詰めたことによるものです。

これは、当時としては極めて異例であったため、特に、源三位、つまり、源氏の公卿（くぎょう）と呼ばれたものです。

これまで数多くの武勲を立て、現政権に多大の貢献をしてきたにもかかわらず、彼は、源氏の武家であることを理由に、正四位の地位に据え置かれるのですが、年齢 70 を過ぎ、若い先短くなって、彼は痛切に公卿としての地位に憧れるのです。これは、次の歌からも、わかります。

のぼるべき たよりなき身は 木の下に 椎（四位）をひろひて 世をわたるかな

[拙訳]

（公卿の地位に昇る伝手を持たない源氏の身では、椎の木の下で(四位の地位に甘んじて)、落ちてくる実を拾って世過ぎするしか仕方がないのです。）

21 世紀の現在になっても、既に功なり、名を遂げた立派な社長さん方が、叙勲となると、目の色を変えるケースを、私は何度も目にしてきました。

何不足ないように見える彼らが、生きていううちに、天皇陛下から、自分が生きて社会に貢献したということのを何とか認めてもらいたいということでしょうか。

なんの利益にも繋がらない勲章をあれだけ真剣に欲しいんだと心底から仰有ることと、源頼政の願いとはどこか繋がるものがあるのかも知れません。

ところで、正四位と従三位とは一見僅かな差のように私たちには見えるのですが、実は、三位以上になると、公卿（くぎょう）の列に連なり、常に昇殿が許されるのです。

ちなみに、昇殿を許されるのは、大臣や大納言・中納言、参議、従三位以上の高官とされており、それに勅許を得れば、特例として、四位と五位の貴族それに六位の蔵人にも昇殿が許される場合があります。いわゆる殿上人（でんじょうびと）ですね。

それ以外は、地下人（じげびと）。

あと何年生きられるかどうかという歳になって、殿上人に憧れるのは、人としてわかるような気がします。

わからないのは、74 歳でやっと憧れの従三位になった源三位入道さん、何を血迷ったか、二年後に反乱を起こすのです。

彼がどうして、この反乱を起こしたのかは、私には大きな謎です。通説は、平家の横暴に

対する不満の鬱屈が耐えられなくなったからというのですが、彼は、平清盛からは絶大の信頼を置かれていましたし、四位から従三位に引き上げたのも、清盛なのです。

清盛は、源氏の一部を味方につけているメリットを十分すぎるほど十分に認識していました。この乱によって、世の中の大方の人間は、とくに源氏の武士達は、間違いなく、

「あの源三位頼政でさえ、平家の専横に我慢ならなかったのだから、我々が我慢できないのは当然だ」と思ったに違いありません。

清盛は、源三位頼政を切ることが、源氏の結束に繋がることを、だれよりもよく知っていたに違いないのです。

ですから、頼政入道を反乱に追い込むようなことをするとはとても思えないのです。

では、誰か？

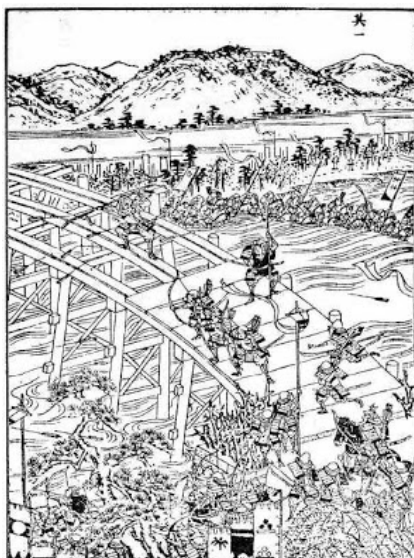
何の根拠もないのですが、私は、清盛のアホな子供達の誰かではないかと思うのです。平家にとって邪魔な「以仁王」を取り除く際に、獅子身中の虫だと思った頼政を陰でそそのかし、平家打倒の挙兵計画に誘い込んだ人物がいたのではないかと思えてなりません。

治承4年(1180年6月20日)平家打倒の挙兵の計画をしているのがばれて、源三位入道、やむなく挙兵に追い込まれます。

勿論、集めた兵力は少なく、僅かに千騎余。対する平家方は2万8千騎。

あえなく破れ、宇治平等院で切腹するに至ります。

このときの戦いの様子は、平家物語の有名な「橋合戦」に生き生きと書かれています。



源三位入道の最後の様子は、少し長いのですが、引用します。

「三位入道は、渡邊長七唱めして『わが頸うて』との給ひければ、主のいけくびうたん事のかなしさに、涙をはらはらとながいて、『仕ともおぼえ候はず。御自害候はば、其後こそ給はり候はめ』と申ければ、『まことに』とて、西にむかひ、高聲に十念となへ、最後の詞ぞあはれなる。」

[拙訳]

(頼政殿は、股肱の臣の渡邊長七唱(となう)を呼んで、我が頸を打てと命じるのですが、唱は、主君の生首を打つことのあまりの悲しさに涙をはらはらと流し、「私には到底できるとは思えません。私にできるのは、御自害なされた後、敵に渡らぬようにすることだけでございます」と申し上げると、「その方の言うことわかった」と仰有って、西方浄土を向き、高い声で南無阿弥陀仏と十回唱え、辞世の歌を詠んだことこそ、哀れを誘います。)

埋れ木の 花さく事も なかりしに 身のなる果ぞ 悲しかりける

あ、そうそう、地下人といえは、昔私のところで飼っていた初代雑種犬の名前は「クロード(蔵人)」。

地下犬ながら、特別なときだけ、座敷に上げてもらえたのですが、大抵は喜びすぎて、すぐに勅許を取り消されるのが普通でした。

二代目は、柴犬。名前は「ゴイ」。

コイツは、クロードより温和しくて、6位から5位に昇格して、家の中の方が多かったんだけど、いたずらをすると外の初代クロードの小屋に追い出されていました。

三代目の名前は「サンミ」にしようと思っていたのだけれど、犬が亡くなるのをもう見たくないという内裏内の対立があって、実現しませんでした。

3.24 壇ノ浦

今日 3 月 24 日は、今から約 800 年ほど前の 1185 年（寿永 4 年）に、壇ノ浦の戦いで平家が敗れ、滅亡した日です。

いわゆる「源平の戦い」というのは、普通「治承寿永の乱」のことを指すことが多いのですが、これは、先の話（「源三位頼政」参照。）に出てくる源三位頼政が荷担した 1180 年の以仁王の挙兵から始まり、1185 年の壇ノ浦の戦いで終わる 6 年間に及ぶ源氏と平家の間の戦いですね。

今やっている NHK ドラマ「平清盛」で、どこまで描くのか知りませんが、平清盛くんは、1118 年生まれで、死んだのが 63 歳のとき、1181 年ですから、清盛くんが亡くなってからたった 4 年で平家は滅亡するのですね。

まさに、盛者必衰、諸行無常です。

この 6 年間にわたる治承寿永の乱は、平家物語の中で一番のハイライトで、この辺りは恥を承知の上なら、いろんな話をする事ができるほど、エピソードが豊富です。

べ、べ、べーん！（琵琶の音のつもり）。

でも、平家物語の世界は、やっぱり専門家の方に語ってもらって、涙を流すのがいいと思いますので、今日は、余り面白くないこの時代の戦いの仕方、武士の戦い方についての話。

どうも、私には、この源平の戦いから、戦争の仕方が非常に変わるような気がするのです。

歴史に詳しい方はご存じかと思いますが、この「治承寿永の乱」の前に、「保元・平治の乱」という戦いがあります。

この乱で、敵対する源義朝くんを死に追いやった清盛くん、朝廷の軍事を掌握します。

ところで、この二つの乱、同じように「乱」という言葉が使われていますが、保元・平治の乱は、武士が武士と戦ったものです。

当たり前じゃないかって？

ええまあ、そうなんです、保元の乱ではせいぜい千騎程度の戦い。平治の乱でも、戦ったのは、3 千騎対 2 千騎くらいの規模なのですね。

つまり、参加したのは、ほぼ全員が武士。

これに対して、治承寿永の乱では、史書を見る限り、参加した兵の数が一桁違うのですね。数万騎対数万騎。

突然、武士の数が増えた？

まさかね。

これ、最近の研究によると、後から起こる治承寿永の乱には、武士だけでなく、非戦闘員というか、補給兵站を担う輜重兵、相手の進軍先の街道に土塁を築いたりする土木を担当する工兵が参加しているからなんですね。

いわば、今で言う総力戦で、この輜重兵や工兵は、武士ではなくて、徴兵された庶民。

となると、普通は、政府軍が強い筈なんだけれど、平家にとって不運だったのは、治承寿永年間というのは、歴史上名高い飢饉の年。

これじゃあ、徴兵しようと思っても、言うこと聞きませんよねー。

無理矢理挑発された農民達、源氏軍が「わあー」と叫んだだけで、「ギャアー」と逃げちゃう。そこにいくと、自分のところの出身の農民達を引き連れている源氏方が強いやね。

平氏の軍制の欠陥は、直属部隊が伊勢・伊賀の平氏が出た地域の家人や「私郎従」と呼ばれる特定の武士だけで、兵の大部分を公権力で動員する形を採っていたことでしょうか。だから、都落ちして平氏追討宣旨が下された時点で、平氏に従う兵は少なくなって、輜重兵や工兵が不足していたようですね。

さて、かくして、敗退を続ける平家が最後に選んだのは、海戦。

海戦なら、武士同士の戦いですから、負ける可能性が少なかったのです。



上の絵図は、安徳天皇縁起絵図。

平家にとっては、まさに背水の陣。というより、海水の陣。

じゃあ、どうして負けたの？

これね、以前は潮流変化説(時間が経過して潮目が逆になったので攻守が逆転した)が有力

だったんだけど、今は専門家の間でもよく分からないみたいです。

そこで、私勝手に思いますのは、

開戦からしばらく敗色が濃かった源氏軍の採ったのが、平家軍の舟の水手、舵取りを射殺す作戦。これが効いたのだと思いますねえ。

水手や舵取りは、武士ではありませんから、ここでも、平家は、武士同士の戦いでは負けていないのに、総力戦では敗れるのです。

勝った方がルール違反しても、負けた方は文句が言えませんからね。

ところで、日本の国民が大好きな義経クンのことを悪く言うと、絶対何か言われそうなんだけれど、義経クンが戦って勝った戦は、すべて、一種の奇襲なんですね。

判官鼻肩で、国民的人気は、義経クンを戦の天才などと言うけれど、この勝ち方はやはり無理があります。

このことを知っている相手には通用しないですからね。

そのことも考えないで奇襲が通用すると思っていた昭和の日本軍って、義経クン鼻肩だったのか、楽観的だったのか、それともただのアホだったのかな？

6.12 死のうは一定

今日、6月12日は、今から450年余り前の1560年に、織田信長が今川義元を破った「桶狭間の戦い」があった日です（永禄3年5月19日）。

桶狭間の戦いは、信長の天下統一につながっていくターニング・ポイントに当たる余りにも有名な戦いで、最近でも何度かドラマ化されていますから、誰もがご存じですね。

この日の夜明け、鷺津、丸根の両砦から、今川方が攻めてきたという連絡を受けた信長は、敦盛の舞を舞って出陣するのですが、これも誰もが知っている場面です。

太田牛一の「信長公記」では、この場面をこのように書いています。

「此時、信長敦盛の舞を遊ばし候。

人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり。一度生を得て滅せぬものあるべきか、と候て、

螺ふけ、具足よこせと仰せられ、

御物具めされ、たちながら御食をまゐり、

御甲（かぶと）をめし候て御出陣なさる。」

この文章、そこに信長が見えるようで、なかなかの名文です。

私は、若い頃から、この「人間五十年」で始まる「敦盛」の一節が大変好きでした。この一節ほど、生死を賭して出撃する人の気持ちを強く表しているものはないと思っています。

人間一度は、自分の人生を賭けなければならないことに直面しますし、私にも恥ずかしながら数回そういうときがありました。

そのとき、この一節を口にすると、不思議に気持ちが落ち着いたことを思い出します。

ちなみに、これは、「幸若舞」の一つ「敦盛」の一節。

一ノ谷の合戦で、平家の若き貴公子、平敦盛を討った源氏の武将「熊谷直実」が、世の無常を感じ、出家の決意をする場面です。

「思へば、この世は常の住処（すみか）にあらず。

草葉に置く白露、水に宿る月より猶（なお）あやし

金谷（きんこく）に花を詠じ、栄花は先立て無常の風に誘わるゝ。

南楼の月をもてあそぶ輩も 月に先立つて有為の雲にかくれり。

人間五十年、化天の内をくらぶれば 夢幻のごとくなり。

一度（ひとたび）生を享け 滅せぬもののあるべきか

是を菩提の種と思ひ定めざらんは 口惜しかりし次第ぞと」

この「敦盛」における熊谷直実は、この世の無常を悟り、世を捨てようとしているのに対して、「信長公記」の信長には

「人間の命は、僅かに 50 年に過ぎず、最も人間に近いとされている下天に住む天人の寿命に比べれば、夢幻のように短く儚いもの。

いずれは死にゆく定めであれば、自らの信ずるところに従って命を賭けることに何の悔いがあるものか。」

という、自分のために賭ける青年武将の面目躍如たる姿が見えます。

このとき、信長 26 歳。

このときから 22 年後の 1582 年 6 月 21 日、天下統一を前にして本能寺の変で倒れた信長。享年 49 歳。



イエズス会の画家ジョヴァンニ・ニコロによる信長の肖像画
(1583- 1590年頃作成)(Wikipedia)

「死のうは一定（いちじょう） しのび草

しのび草には何をしよぞ

一定 語り起こすよの」

(死が避けられぬものならば、せめてこの世に、我が名を偲ぶよすがを残しておこうぞ。

後の世でも語り継がれるように。)

まことに、彼が好んだといわれるこの歌のように、後世の人々にその遺業が偲ばれ、語り継がれるようになった五十年の一生でした。

6.14 領土争いだったみたい

一昨日 6月12日は、今から451年前に桶狭間の戦いが行われた日でしたが、この戦い、だいたいなんのために行われたのか、本当に奇襲だったのか等々、最近、かつて言われていたのと違う説があるようですので、今日は、その点について、すこしだけ、触れてみたいと思います。

私がまだ中学生の頃、図書館で借りて読んだ本の中の桶狭間の戦いは、今川義元が大軍を率いて上洛する途中、桶狭間で油断していたところを織田信長が奇襲し、討ち取ったというものでした。小よく大を制した天才的な奇襲作戦として、信長の際だった作戦能力や決断力などが讃えられ、一方、大軍を率いてなすところなく敗れた義元の愚劣さが対比されていたような覚えがあります。

これ、当時の通説で、これに対して「信長公記」の記述に基づいて疑問が呈されたのは今から20年ほど前でしょうか。現時点では、現場検証などによって、信長公記の記述の方が史実に近いことが分かってきたようです。

さて、まずこの戦いの背景から。

この戦い、もともとは、三河との境にあって、尾張に属していた山口左馬助父子が今川方に寝返り、その居城鳴海城ばかりか近辺の大高城、沓掛城も今川方に付き、信長クンに反旗を翻したのがそもそものきっかけだと考えられます。

調略に成功した義元クン、調子に乗って、知多半島と反対側の海西郡（今の弥富市辺り）にも調略の手を伸ばしたから、信長クン、このまま好きにさせておくと、東と西から挟み撃ちにあう形になると焦ったのですね。

ようやく尾張のほぼ全体を統一したばかりの信長クンが打った手は、敵の手に渡った鳴海と大高の城を分断し、取り囲む形で5つの砦（鷺津、丸根、善照寺、中嶋、丹下）を築いて、封鎖作戦を実施しました。今で言うと兵糧攻め、経済封鎖作戦ですね。

図は、今川方の三つの城と織田方の5つの砦の位置。



これと同じようなことは、結構あちこちで行われていて、少し後で話に出てくる「長篠の戦い（6.29）」で長篠城の周りに武田側が築いた砦などと同じですね。

折角、尾張に橋頭堡を確保した義元クン、これを見殺しにしては、東海一の弓取りの名がすたる。

とりあえず、信長方の砦を粉碎して、痛い目に合わせとかなきゃ。

それにこの頃、三河の家康クンもチョット怪しい動きをしてるし、この辺で俺ンちに逆らえば痛い目を見るよって示威行動しとかなくちゃ、と思ったんでしょうね。

ちょっと行って頭を叩くつもりで、示威行動もかねて、2万5000の大軍率いて出陣。駿河、遠江、三河の三つの国の国力からみるとちょっと多い気がするけれど、補給のための要員も含んでと思われるので、そのうち戦闘員は1万5000くらい。

尾張の小倅、出てこないと思うけど、出てきてもせいぜい5000。まあ、3倍もいれば、手も足も出せないもんね。と思ったに違いない。

義元クン、まず大高城と鳴海城に兵と兵糧を入れ、邪魔になる織田の砦を取り除くことにして、3~4000の兵を大高方面に派遣しました。

大高城は、三河の小僧家康クンの担当。これは属国を最前線で使う当時の常識。

家康クンたち、大高城を囲んでいた鷺津、丸根を落として無事兵糧搬入に成功。

さて、残るは、鳴海を囲んでいる丹下、善照寺、中嶋砦。

このうち、チョット離れている丹下方面に、別働隊精鋭5000を派遣。丹下を落として清洲から来る織田軍後詰めを牽制する役目。

義元本軍に残るのは6000ほどで、中嶋、善照寺をやっつけて鳴海に入るつもりで先鋒隊を動かし始めたときに、信長クンの本隊と衝突したんですね。

私には、素人で判断能力なんてないけれど、これが桶狭間の戦いについての今の有力説のようです。

これから分かるのは、義元クンには、上洛の意思なんてなかったということですね。

ちょっと冷静に考えてみれば分かりますよね。尾張を突破しても、美濃も近江もありますし、補給隊を含んだ2万5000程度で京都まで制圧できるはずがありません。

目的は、おそらく新たに獲得した尾張三河国境の安定化。

次に目指そうとしたのは、信長クンの資金源だった尾張の諸港の封鎖。

義元クンもなかなか賢かったのですよ。

ただ運がなかっただけ。

奇襲かどうかについては明日。

6.15 見えていると奇襲は無理

昨日の話に続いて、奇襲かどうかの話。

緒戦で大高城を囲む鷺津、丸根の砦を落として、幸先良しと思った義元クン、小高い桶狭間山に陣を張り、次の作戦に入りますが、まず駿河の精鋭部隊 6000 を丹下砦の攻略に向けて進発させます。

丹下を先に落とすことで、清洲から来る信長軍の後詰めを牽制し、善照寺、中嶋を挟み撃ちにして殲滅することを目指したと考えられます。

しかし、自軍を分割したために、義元クンの周りは 5、6000 くらいを残すという状況になりました。でも、緒戦の連敗で、信長軍主力は 1000 程度とっていたようですから、これでも十分すぎると判断したんでしょうね。

ところで、その時点で信長クンのいたのは中嶋砦。この砦、地形的に低いところにあったために、今川軍からは、その動きは丸見えだったようです。

地図で見る限り、桶狭間山と鳴海城を結ぶ直線上に信長クンのいた中嶋砦があって、両者の距離は 2.5 キロ弱。



中嶋砦を出た信長クン、2000 の手勢を率いて義元クンの軍に向かって進軍しますが、そのときの信長クンの言葉。

「各よくよく承り候へ。あの武者、宵に兵糧つかひて夜もすがら来り、大高へ兵糧入れ、鷺津丸根にて手を砕き、辛勞してつかれたる武者なり。こなたは新手なり。其上小軍ニシテ大敵ヲ怖ルルコト莫カレ、運ハ天ニ在リ、此語は知らざる哉」

信長クンからは、敵の先鋒軍が見えているのですね（ということは、向こうもこちらが見えている状態）。

実際は、信長クンの見た敵は新手だったのですが、向こうは疲れているはずだからと言って部下を叱咤し、運は天にある、われに続け、と言われれば、頑張らざるを得ませんよね。

両軍が接触するまであと 10 分、桶狭間山の山際まで来たときに、急に豪雨に見舞われます。豪雨は、織田軍の背後から、今川軍の正面に吹き付けたため、今川軍からは織田軍の勢いがわかりにくかったに違いありません。

豪雨はすぐ止んだのですが、以下、信長公記の記述の引用。

「空晴るるを御覧じ、信長鑓（やり）をおつ取て大音声を立て、すはかゝれかゝれと仰せられ、黒煙立てゝ懸るを見て、水をまくるがごとく後ろへくはっと崩れたり。弓・鑓・鉄砲・のぼり・さし物、算を乱すに異ならず。今川義元の塗輿も捨て くづれ逃れけり。」

これによれば、桶狭間山の上から麓にかけて布陣していた義元軍は、信長軍の突撃の前にもろくも崩れ、義元クンの親衛隊 300 は、主君を守って丘から下りて沓掛城に向けて後退します。

勢いづいた信長クンの軍勢と後退する義元クンの軍勢。

こうなったら、あまり数は関係ないみたい。

義元クンの親衛隊、

「初めは三百騎ばかり真丸になって、義元を囲み退きけるが、二、三度、四、五度帰し合わせ合わせ、次第々々に無人になりて、後には五十騎ばかりになりたるなり。

信長も下立って、若武者共に先を争ひ、つき伏せ、つき倒ほし、(中略) 服部小平太、義元にかゝりあひ、膝の口きられ倒伏す。毛利新介、義元を伐臥せ頸をとる。」

桶狭間山を下りて沓掛に戻る道は、狭間の間の細い道であり、両側は深田、遁れる側は道から外れると足を取られ、次々と討ち取られていく有様が、信長公記では語られています。

ところで、義元クンの軍、どうしてもろくも崩れたのでしょうかね。

この点については、信長公記も何も言ってませんね。

ここからは、私の想像。

第一に、信長軍より高いところに布陣していた義元軍は、人数が多い自軍に向かって、しかも下から上に向かって信長軍が突然突撃してくるとは思ってなかったんじゃないでしょうか。

第二に、義元クンの先鋒軍、普段は農耕に従事している兵が中心だったのではないのでしょうか。農民兵は、攻めの局面では良いのですが、守勢に回ると途端に弱くなるのですね。こんなところで死んだのでは元も子もない、命あつての物种。とにかくものすごい勢い（黒煙立てゝ懸る）で突撃してくる敵軍の正面には留まるつもりが無かったのではないですかね。

第三に、義元クンの親衛隊も、留まって戦えば何とかなっただかも知れないのに、組織的に引いてしまったんですね。沢山味方がいるから、少くく後ろに下がっても、なんとかなると思ったのじゃないですかね。

先に動いた勢いのある前懸かりの軍勢を受け止めることができるためには、防禦陣形をとってなければいけないのは常識だけれど、このときの義元クンの軍勢、鳴海城に向かって進軍しようとしていて、豪雨で一時ストップしているという中途半端な状況。

こういう時に襲われると、たとえ、正面衝突でも、士気が上がり、動き出している方が強いんですね。

敗因は、義元勢の中に、信長勢の前に立ちはだかって槍を振るう勇者がいなかったことかなあ。

これが、私の妄想に近い想像です。なんの根拠もないのですけれどね。

7.30 姉川の戦い

今日（7月30日）は、1570年、北近江で、姉川を挟んで、織田・徳川連合軍と朝倉・浅井連合軍が戦った「姉川の戦い」があった日です。

この戦いには、ご承知のように、前段があって、信長クンが1ヶ月前に、越前（朝倉）侵攻を企て敦賀の金ヶ崎城を攻めたとき、信長クンの妹であるお市の方の夫、浅井長政の裏切りによって、前後を挟まれ、窮地に陥り、信長クン、ほうほうの体で朽木谷を抜けて京都に逃げ帰ったという大敗を喫していました。

この戦いは、そのときの報復戦なのですね。

これは、今から見ると、どう見ても信長クンが悪い。

お市の方を嫁がせるときに長政クンと結んだ協定には、浅井家の同盟者である越前朝倉は攻めないと定めていたのに、なんの相談もなく、上洛に応じないというだけで越前に侵攻したのだから、長政クンが協定違反と怒ったのは無理ありません。

しかし、この頃から、独裁者としての性格が顕著に出てきていた信長クン、自分の協定違反を棚に上げ、裏切りは許せんと浅井殲滅に全力を挙げます。

独裁者がいる大国の隣りの小国は、いつの時代でも可哀想ですね。

そういえば、私たちの国にも、そんな国が近くにいますよねえ。

信長クン、敦賀からの撤退からたった1ヶ月で、体勢を立て直すとすぐに攻勢に出ます。

私、今でも、あれだけの敗戦の後に、たった1ヶ月で、どうやって他国を侵攻できるほどに回復したのか、疑問に思っているのですが、それはさておき。

最初に手がけたのは、浅井方の第一線を崩壊させることでした。

昔、自分が桶狭間の戦いの前に、自領の鳴海城主を今川に取り込まれてひどい目にあって以来、とにかく、信長クン必ず、調略をしてから侵攻していますね。

このときも国境に当たる地の城主二人を寝返らせて、すぐに電光石火、近江に進出し、小谷城下を焼き払っています。

長政クン、こんなに早くやってくるとは思わず、油断していたのですね。

とにかく、朝倉に援軍要請。

やっと到着した朝倉軍を入れて、浅井朝倉連合軍は1万8千。

織田軍は徳川軍を加えて2万8千。

6.29 長篠の戦い

長篠の戦については、昔高校の日本史で三千挺の鉄砲の三段撃ちを習ったときに、信長くんすごーいと思いましたね。

火縄銃の射程は良く飛んで 100 ㍎、殺傷できる射程は 60 ㍎くらい（その頃は知らなかった）。

一方、この頃の日本の馬は、サラブレッドとは大違いで、背の高さは 1 ㍎ 30 cm くらい。一生懸命走っても、時速 15~20 km くらい。人が走るのと大して変わらない。

でも、60 ㍎の距離であれば、時速 15 km でも、15 秒ほどで走り切っちゃう。

だから、どんなに早く鉄砲の弾込め（早くて 20 秒）をしても、一発目が当たらなかつたら、斬り込めるんですね。

だから、三段備えの連続発射。

アッタマ良いー

でもね、大学に入って自分で調べてみると、なーんかおかしい。

勝頼クンの武田勢、騎馬隊で突っ込んでいって、鉄砲でバツバツと撃ち殺されているのに、懲りもせず、どうして何度も攻撃してるの？

あれ！

この戦い、早朝から始まって 8 時間もやってる。

三千挺の鉄砲の三段撃ちだと、1 時間もかからないで、お終いににならない？

勝頼くん、全滅に近いぼろ負けをしてるのに、すぐには滅亡しないで、その後結構頑張ってる。どうして？

次から次へ??が出てくるけど、結局そんなこと誰も書いていなくて分からずじまい。

もう一度これに興味を持ったのは今から 20 年ほど前、大田牛一の「信長公記」を元にした一般向けの本が出てから。

三冊ほど読むと、素人の私でも少しは分かってくる。

この戦い、天正 3 年 5 月 21 日（西暦で言うと 1575 年 6 月 29 日）、長篠から少し離れた「あるみ原」で起こっているのですが、もともと、この戦い、家康さん方の城（長篠城）が勝頼クンに囲まれて落ちそうになったので、慌てて、信長クンに「助けてちょ」と頼んで来てもらったもの。

信長くん、一大決戦なんかするつもり全くなく、最初から「後ろを守っててやっから、長篠はお前ら自分でやってちょ」なんて家康クンに言ってたと思う。

だから、信長くん、決戦の 3 日前に現着しているのに、助けに行かずに、塹壕と柵づくりに精を出してた。

長篠城救出作戦は、家康クンの主力西三河勢の酒井くん達が、信長クンの鉄砲隊を借りて

実施。

でもね、これが思いのほか上手くいって、勝頼クン、腹背に敵を受けて、長篠は諦めてこのまま引き揚げるか、正面の信長クンと一戦交えるか、どちらか選ばなきゃいけなくなっちゃった。

今から思えば引き揚げといた方が良かったのにねえ。魔が差したというか。

戦いは、朝早く、家康クンの部隊が柵から出て勝頼クンの中央軍と押したり、引いたりしていたのに対して、信長クンの部隊は、塹壕に立てこもったまま。寄せてくる武田軍に対して、鉄砲だけで応戦したと書かれていますね。

でも、信長クンも長篠城救出部隊に鉄砲 500 を貸してるから、主力部隊が持ってたのは 1000 挺ちょっとくらいだったみたい。

武田の方の一番手は山県昌景隊。全員騎馬ではなくて、騎馬は全体の 1 割位。

ですから、騎馬隊がわーっと押し寄せて、鉄砲の一斉射撃で、バタバタと馬が倒れるというのは、映画の世界だったんですね。

そもそも、現場は川を挟んだ段差がある狭いところ、攻めてくる方が横一線、同時に射程距離に入るなんてあり得ないから、全員一斉射撃なんかほとんどあり得ない。納得、納得。

でも、信長クンの部隊、柵と塹壕から一步も出ないで、とにかく鉄砲撃ってたことはホントみたい。勝頼クンの山県隊や土屋隊などが不運だったのは、第一発目で山県クンなどの部隊長が弾に当たっちゃったこと？



その後、懲りもせず波状攻撃をしているというのは、組織的攻撃とは思えなくて、信長クンの側がいつまでも塹壕から出てこないで、しばらく様子を見ていて、また攻め込んだら、また鉄砲にやられたというのが実際じゃないかなあ。

それでも考えないと、午後 2 時に信長クンが「追撃一！」って言うまで、8 時間、どうしてたの？ ということになりませんか。

この戦い、武田勢の戦死者が伝えられている 1 万 2000 人もいたなら、その後勝頼クンすぐ滅亡してますね。実際にはその後も戦い続けて、最終的に部下の裏切りでアウトになるのは、7 年も経ったあと。

どうも戦死者は 1000 人ちょっとにすぎなかったという説があって、こっちの方が正しいみたい。勝頼クンにとって打撃だったのは百戦錬磨の部隊長達が緒戦で、鉄砲に当たって

死んだことですね。

ということで、長篠の戦いって、私たちが習ったのと似ても似つかぬものだったみたい。

これ信長クンの側から単純化すると、単なる塹壕戦。

だとすると、攻める側は、守る側の3倍の兵力は必要なのが常識。

なのに、攻める側が少ないんだから、鉄砲があってもなくても負けるよね。

そう思えば、日露戦争の時の旅順要塞攻防戦となんだか似てるなあ。

10.21 けしんかぎい

今年も妙円寺参りの日がやってきました。

今からおよそ 400 年前の 1600 年 10 月 21 日(旧暦 9 月 14 日)、関ヶ原の戦いに敗れた島津軍三百は、敵に後ろを見せて逃げることはせず、全軍一団となって東軍の包囲線の正面突破を試みます。

島津義弘を守って走り抜き、追いつかれると一部が留まって凄まじい戦闘を行い、死をもって稼いだ時間でまた走るということを繰り返して(「捨てがまり」と言います)、漸く伊勢路に脱出できたのは僅かに五十名余だと伝えられています。

「捨てがまり」というのは、凄まじい言葉ですが、退却に当たり、迫りくる敵から主力を逃すために、独り残って、槍を突き立てて座り、鉄砲を構え、敵を待ち、追っ手の将を狙い撃ちし、その後、槍を構えて敵中に突っこんで行くという戦法のことです。もとより生きて帰る望みは全く無く、味方が退くための時を稼ぐための我が身を捨てての戦い方です。

このときの島津軍の戦闘のすさまじさは、大軍をもって追っ手を指揮した東軍の将、井伊直政と松平忠吉が負傷し、このときの傷が元で井伊直政はまもなく死亡しているのですが、このことから窺えます。

後年、徳川家康は、敗者となった薩摩島津の領土には手を付けなかったのですが、巷間、この戦いが家康をして薩摩に手を出すことを躊躇させたと言われています。

鹿児島では、400 年後の今日に至るまで、この戦いのことを忘れないために、毎年鹿児島市内から約 20 キロ離れた伊集院にある徳重神社(妙円寺跡)までを行軍する習わしを続けているのです。

これが「妙円寺参り」と呼ばれる行軍で、今も多くの市民が参加する行事となっています。

今でも、若い方々の中には、往事の通り、20 キロをまさに走り抜ける方々がいます。この戦いで身をもってふるさとを守った祖先のようにありたいと願って。

もちろん、鹿児島勤務時代、私も参加しました。但し、歩いてですが。

最近、若い世代の方々が、全力を挙げて物事に取り組むということが少なくなったということをよく聞きます。

しかし、私は決してそんなことはないだろうと思っています。

ただ単に、命をかけて取り組めるようなことを見出すことができなくなっただけだろうと思います。

むしろ、彼らを率いる方々の側に、若い方々が行わなければならない行為の意義を伝え、

理解してもらおうという努力が足りないのではないかと考えています。

「けしんかぎい」（いのちの限り戦う）の言葉は、鹿児島県の武道大会で掲げられる応援幕によく見かける言葉です。

4.24 片倉小十郎と伊達真田家

私が10年間の月日を過ごした仙台ですが、仙台城の大手門跡の手前、広瀬川を渡ったところに伊達家の重臣「片倉小十郎」の屋敷跡があります。この片倉小十郎は、伊達藩の重臣中の重臣で、白石1万8000石の領主です。

「小十郎」は片倉家の代々の当主の通称で、小十郎初代の「片倉景綱」は伊達政宗に仕え、会津、米沢、福島、仙台と領地を拡大した伊達政宗の懐刀と言われた智将でした。

その子重長は、「鬼の小十郎」と言われた智勇兼備の猛将で、大阪の陣で抜群の戦功をあげ、「白石城」の領主になります。白石城は、徳川幕府が取った一国一城制の例外となった伊達藩の二つ目の城です。下の写真は白石城。



私がこの「鬼の小十郎」重長に関心を持ったのは、大阪夏の陣で散っていった真田幸村の娘「阿梅」を妻とし、幸村の次男「大八守信」を命をかけて匿(かくま)い、後に伊達家の家臣とし、「伊達真田家」を立てさせていることを知った時です。

関ヶ原の戦いで真田家が、「当主昌幸と次男幸村(信繁)＝豊臣方」と「昌幸の長男信之＝徳川方」に分裂したことはよく知られていますし、その後、豊臣家の滅亡と同時に、幸村とその長男大助が戦死したことも多くの方が知っておられます。

徳川方についた信之は、その後松代藩10万石の藩主となり、代々の真田の当主は武田信玄が築城した松代海津城の城主として明治を迎えるのですが、豊臣方についた真田幸村の方は、断絶したと思われる方が多いようです。

しかし、真田幸村直系の血をひく大八守信を祖とする「伊達真田家」は、明治まで続きます。

幸村の血は、危機に直面してその才能を発揮するものでしたが、明治維新を前に、危機に直面した伊達家の家臣として、この伊達真田家の子孫は機略を持って活躍します。そのときのことはまたいつか機会を見て、お話できればと思っています。

現在、片倉小十郎の居城「白石城」は、平成7年、往時を偲ぶ木造天守が復元され、蔵王の峰嶺を正面に望む城郭の上に静かに立っています。

桜の季節、城内に咲き誇る櫻の花越しに見る雪を戴いた蔵王は、それはそれは美しく見えます。



千曲川の流れと浅間を望む信州上田の地と

清流白石川と蔵王を望む奥州白石の地は、大変よく似ているのです。

白石から少しだけ離れた隣の蔵王町に領地を与えられた真田守信は、この風景をどのような気持ちで眺めていたかを思うと、こころが少し切なくなります。

11.9 戦死の少ない昔の合戦

先日、東京国立博物館で一領の鎧を見ました。

東京国立博物館には、武具などの常設展示がされているコーナーがあるのですが、今は「武士の装い」というテーマの展示がされています。

今回の目玉は、室町時代の鎧で重要文化財の黒韋肩妻取威胴丸（くろかわ かたつまどり おどしの どうまる）、要するに黒い革製の鎧。



春先は、島根の日御碕神社の白糸威鎧兜大袖付が展示されていました。こちらは鎌倉時代の作で、国宝。

どちらも武具というより素晴らしい美術品なのですが、不思議なことに余り重さを感じさせません。

しかし、実際は、これら武将が着ていた鎧の重さは、22～26 kgくらいあります。

私なら、これを着けたら 100 歩も走れないでしょう。当時の武将達も、これを着て 10 分も全力疾走することは難しいと思われますし、この格好で地上戦闘を 1 時間も続けることなど不可能と思われますね。

このような鎧を着ているのは、やはり防禦戦闘しかしないですむ指揮官か、或いは専ら弓での騎馬戦闘をする騎兵か、どちらかの可能性が高いと思いますね。この鎧を着けていても馬上ではその重さの大半を馬が引き受けてくれるからです。

ところで、その馬ですが、これもよく知られていますように、日本の戦闘用の馬の大きさは、現在のポニー並みで、体高は 130 cm くらい。名馬と言われたものでも 140 cm を少し超えるくらいでした。

現在時代劇に出てくるサラブレットの体高は 160～165 cm ですから、30 cm 以上小さいのですが、もちろん、人間様の大きさもずっと小さかったので、まあ、馬尺に合っていたのかも知れません。写真は（ブログ「越後の虎」から借用しました）



この馬、全力疾走して時速 40 km。サラブレッドが時速 60 km ですから、まあ、バイク並みですね。

でも、上に乗っている鎧付きの人間の重さが重さですから、人を乗せている場合の時速は 10~15 km くらい。自転車くらいの速度に落ちてしまいます。

また、体力的にも、この速さで 10 分程度走るともう限界だったようです。

ですからね、1 km も先から敵に向かって突っ込んでいくなんてことは考えられないのです。

大体、矢の届く範囲は最大 200 ㍎、普通は 5、60 ㍎で射ち合っていたようですから、250 ㍎くらいのところから、1 分間ほど全力疾走して、その間運良く矢に当たらなければ、敵陣に切り込めたようです。

つまり、昔の合戦なるものは、200 メートル程度の間を挟んで睨み合って、声が届く範囲で罵り合って、機が熟したら、じりじりと進んで、矢と石の応酬。

意外と近かったのですねえ。

昔、読んだ小説の中に、「ヤア、ヤア、遠からん者は音にも聞け、近くば寄って目にも見よ。我こそは、相模の国横浜村の住人、青葉のおさの坊なるぞ。我と思わんものは、我が首とって手柄とせよ」なんていうのがありました。これ、200 ㍎の近さだから聞こえたのですね。

しかし、鉄砲が出てくると、こうはいきません。

鉄砲の最大射程は 500 ㍎、有効射程は 200 ㍎、普通は 100 ㍎で撃っていたようですから、やはり鉄砲の出現は、騎馬の将には脅威だったと思われ、騎馬戦を封じるには有効だったのでしょう。

ところで、ある本を読んでいましたら、源平の戦から戦国の戦までの戦闘での死傷者が、どのような武器で死傷したかという研究が載っていました。

結果は、私の予想とは違って、弓、礮、(後には鉄砲)によるものが約 7 割。槍と刀などの接近戦用の武器によるものが約 3 割。

アレー？

矢戦は、本格的な白兵戦の前哨戦じゃなかったっけ。

これじゃあ、逆じゃあない？

ン？ ということで、ここから先は、私の妄想。

関ヶ原の戦いや姉川の合戦など、みんな一緒に入り乱れてちゃんちゃんバラバラした大合戦を別とすれば、普通の合戦は、矢合戦の後、長い鎧を使っての叩き合いでお終い。

みんな死なないように工夫していたんじゃないかなあ。

稀に行われた短槍と刀による白兵戦は、あっちでちょこちょこ、こっちでチョコチョコ、その中に、ときどき騎兵による弓での一騎打ち。

騎馬戦は、相手の右側に回り込んだ方が勝ち。右側に矢は撃てませんからね。

刀は、矢が尽きた後の最後の手段。

資料を見ている限り、刀を振りかざしての騎馬戦や白兵戦だらけの時代劇の戦争場面なんて滅多にないみたい。

でも、これじゃあ、面白くもおかしくもないなあ、やっぱり真実は人を幻滅させるのかなあ。

もっとも、大合戦で一方の軍が総崩れになった場合、追撃戦では多くの戦死者が出たようですが、そもそもそのような大合戦自体がそんなに多くなかったのですね。

兵の大損傷が、自分の国の存亡に直結するような危険な一か八かの戦いをするほど、昔の武将達は愚かではなかったということでしょうかね。

4.20 日露戦争の戦死者

先日の話の「安道名津」(食べ物の話参照)は、幕末にタイムスリップした医師「南方 仁」が、脚気の改善食として考え出したものでした。

もし、これが、定着していたら、結核と並ぶ戦前の日本の二大死病の一つが解決し、大きく歴史が変わったと思います。

江戸時代、脚気は「江戸患い」と呼ばれていたのですが、これは、江戸の中期以降、比較的豊かになった江戸市民が米を精米して白米として食べるようになって以来、ビタミンB1が不足するようになり、脚気による死者が急増したもので、原因がわからなかったため、不治の病いとされたものです。

江戸後期の徳川の将軍たちや大名たちの中にも脚気で死亡したと思われる方々が多く、「仁」でも皇女和宮さんの脚気を治す話がありましたね。

明治維新から 25 年後、当時の清国との間で戦われた日清戦争は、我が国の圧勝で終わりますが、記録に残されている日本軍の戦死者は 293 人。

ところが、この戦争中、日本軍は、脚気で 3944 人の兵を失っているのです。

戦死者より多い？

そうなんです。

正面の敵より、背後の敵の脚気によって、10 倍以上の死者が出ているのです。

日本の兵の多くは、地方の農家出身。

白米を食べることが少なかった彼らは、軍に入るとお腹いっぱい白米を食べることができ、僅かな副食でも軍での生活をありがたく思ったという話が残っています。

これまで、玄米や麦でビタミンB1に不足しなかった彼らが、憧れていた白米を食べて死病にかかるというのは、なんとも可哀想な気がします。

さすがに、軍内部では、この原因不明の死病が、なぜ軍隊の中で集中的に発生するのが問題になりました。

しかし、ここで、軍の対応は、陸軍と海軍で大きく別れることになります。今の医学の言葉で言えば、病理学的アプローチをしたのが陸軍、臨床学的アプローチをしたのが海軍なのです。

海軍は、種痘を始めたジェンナーに見られるように、原因を究明するより、どうしたら病気を防ぐことができるかを重視する英国方式。

同じ軍艦の中で、士官はほとんど脚気にかからず、下士官以下の兵士に脚気が集中して起こることに気付きますが、もし、脚気が細菌による伝染病であるとすれば、これはおかしいということになります。

一方の陸軍の方は、コレラ菌や結核菌を発見したコッホにみられるように、原因究明に重点を置くドイツ方式。この時点で、脚気がビタミンB1の不足が原因とは分かっていませんでしたので、見知らぬ細菌による伝染病と考えたのです。

この陸海軍で異なる二つの考え方は、この後、日本に大きな悲劇をもたらします。

10年後に起こった日露戦争で、全国の至る所から徴用された兵士は、ロシアとの激しい戦いで多くの戦死者を出しますが、その数は4万7000人。

しかし、実は、この戦死者以外に、背後の敵、脚気により戦病死した多くの兵士がいたのです。その数は、2万7800人。

その殆どは、陸軍の兵士でした。

昨日、東日本大震災の被災者の窮状をよそに、総理大臣不信任案を巡って展開された愚劣きわまりない騒動を見ていて、私は、なぜか、脚気を巡る陸海軍の対立を思いだしてしまいました。

どうして、陸軍と海軍は、共同して脚気対策に取り組まなかったのでしょうか？

死ななくてもよい多くの兵士達が、戦うこともかなわず死んでいったことを思うと、今回の震災で被災された方々に、同じような不幸がこないように祈るばかりです。

4.21 森林太郎と安道名津

先日、日清・日露の両戦争で、日本陸軍は脚気によって、膨大な兵士の戦病死を出したことをお話ししました。

その背景には、陸軍と海軍のつまらない権威（メンツ）上の対立があったことも申し上げました。

昨日は、脚気による戦病死者数（日清戦争約 4000 人、日露戦争約 2 万 7800 人）しか申し上げませんでした。日露戦争では、出征した兵士 110 万人のうち、21 万 1600 人が脚気にかかりました。

全体の 2 割という驚くべき数字です。

脚気は、今でこそ、病気のうちにも入らないほどで、この日記をお読みの方には、その深刻さが理解できないかも知れませんが、当時、この病気は不治の病で、手足のしびれ、足のむくみという症状が進行すると、歩行困難になり最後には心不全で死亡するという、アジアにだけ存在する風土病であると考えられていました。

旅順要塞攻防戦で、ロシアの要塞めがけてよろめきつつ突撃する日本軍の兵士達をみて、当時の海外観戦武官達の間では、日本軍の兵士達は、突撃の恐怖から免れようと突撃前に酒をあおっていると思われ、その旨の記録が残されています。

脚気にかかって満足に走ることもできない足を引きずって、機関銃の前に突撃していった兵士達の心を思うと、今でも私は胸が熱くなり、その無念さを思って涙が出そうになるのです。

どうして、こんなことが起こったのか。

海軍が、軍医局長高木兼寛の英断で採用し、克服していた脚気の予防策（麦飯供給）については、陸軍でもこれを採用しようとした前線指揮官や軍医達がいたのです。

しかし、陸軍の場合、その中枢にいた軍医官たちは、これらの声に耳を傾けることはありませんでした。

平常時はともかく、戦時になると、海を越えて送られてくる兵糧は、白米のみでしたから、前線指揮官は、部下に麦飯を食べさせたくても、どうにもならなかったのです。

当時の第 1 師団の軍医部長鶴田禎次郎が残した「日露戦役従軍日誌」では、「麦飯給与の件を森（第 2 軍）軍医部長に勧めたるも返事なし」という記述が残されており、第 1 師団が属していた第 2 軍の軍医部長だった森林太郎に対して、麦飯の支給を願ったが、握りつぶされたことが記録されています。

森は、かつてドイツに留学し、パストゥールの下で細菌学を学び、陸軍の脚気細菌説の旗頭でした。

日露戦争後の 1906 年、彼は、陸軍軍医総監になるのですが、その後も、海軍の実施した脚気対策を認めず、死ぬまで自らの過ちを認めることはありませんでした。



私は、文学者「森鷗外」の残した優れた業績、特にその歴史小説と翻訳には賞賛を惜しむつもりはありません。

しかし、日露戦争で死んでいった兵士達のことを思うと、どうしても人間、森林太郎を心の中で許すことはできないのです。

脚気がビタミン B1 の不足によるものであることは、ビタミン B1 の発見者であった鈴木梅太郎博士によって確かめられます。

1910 年、明治 43 年のことでした。

南方仁の「安道名津」から、45 年後です。

しかし、その後も、鈴木ビタミン B1 原因説に対しては、ドイツ医学中心の我が国医学界は、批判を浴びせ続けます。

鈴木梅太郎が、医学者ではなく、農学者であったことが、その理由だったと言え、そんなバカな！

今では、多くの方がそう思われるはずです。

今では、誰一人疑うことなき、脚気の原因。

それが、つい最近まで、ガリレオと同じように「それでも地球は動く」と言わなければならないような状況だったのです。

権威や面子が、どれほど人を不幸に陥れるか、

私は、もっとも過去に不幸な歴史のことを知ってもらえれば、もう少しこの社会もよくなるのではないかと考えています。

8.16 ささやかな決意

これで何回目だろう。昨日「硫黄島からの手紙」を見た。

私の母は、弟（私にとっては叔父）を先の太平洋戦争で失った。

叔父は、東京帝大在学中、学徒出陣で戦争に駆りだされ、終戦間近の硫黄島で戦死した。もちろん、遺骨などない。



母は、戦争が終わってから生まれた私を、叔父の生まれ変わりだと思っていた節がある。私の父は厳格な人だったが、母はどんなときも私に優しくかった。私は母に叱られた記憶がない。

私が大学を卒業して、叔父が目指していたのと同じ道を歩むことになったとき、母は嬉しかったようである。

「ようである」というのは、母が亡くなった後に叔母から、私が叔父の志を継いでくれたと母が本当に嬉しそうに話していたと聞いたからである。

叔母の言によると、母と叔父は幼い頃から大変仲が良く、当時台湾に住んでいた家族の許を離れて、二人で東京に出、互いに助け合いながらそれぞれの望む道を進んでいたのだが、戦争によってその希望と将来の夢は断ち切られた。

これらのことを、私は母が亡くなるまで知らずにいた。

母は、私には何も言わなかった。

ただ、今から思うと、母は、ドラマであろうと何であろうと、戦争を題材とするものが嫌いであったことは確かである。雨の中の国立競技場での学徒出陣の白黒映像などは決して見なかった。

私が将来の進路についてどうしようと悩んでいたときに、母が、××（叔父の名前）が生きていたら、あなたの相談に乗ってあげられたのにと言っていた記憶がある。

今では、戦争を知らない世代の私にも、母の取り返せない悲しみくらいはわかる。

私は、不戦論者ではないし、絶対的平和主義者でもない。

祖国が戦場になれば、たとえ、何もできなくても、戦う覚悟はある。

隣の国のやくざな振る舞いに憤りを感じることも頻りである。

しかし、同時に、どんな理由があろうとも、自国の外での戦いに、自分の子供や孫を送り出すようなことはしないし、他人からなんと言われようと、そのようなことを食い止めるためなら、どんなことでもしたいと思っている。

戦後ほぼ 70 年の間、我が故国は、平和で、安全で、自由で、ほぼ公正平等で、まあまあ豊かな生活を実現してきたと思う。

考えてみれば、有史以来、このたった五つの条件を同時に実現することのできた国は極めて少ない。

豊かな国にはたいい大きな貧富の格差があり、ひどいときには奴隷がいたりした。曲がりなりに平等を唱う国は例外なく貧しく、支配層は極端に不公平が当然、他国民を殺したり、侵略するだけでなく、自国民同士が殺し合う国も枚挙にいとまがない。

戦後の我が故国は、世界的に見ても、長い人類の歴史から見ても、奇跡と呼ぶのがふさわしいものだと、私は思う。

たとえ、表向きは押しつけのように見える憲法でも、自国の安全を他国に委ねているように見えても、敵に向かって一発の砲弾を撃つこともなく、平和のうちに、殆どの国民がこのような豊かな生活を享受している国は、世界に数えられるほどしかない。

である以上、どうしたらこの状態を維持することができるのかを懸命に考えるのが、我らの責務だと私は思う。

奇跡的な状況である以上、それが長続きしないことは、人類の歴史を顧みればわかる。

それだけに、私は、この奇跡を本当に貴重なものと思い、仮にどうしても、どれかを失わなければならないとすれば、それはどれなのかを必死で考えなければならない時にきていると思う。

今、安全や平等や自由を失っても、豊かさを維持しなければならないと我々は本当に思っているのか。平和を犠牲にしてでも確保しなければならないものは、何なのか。

私は、きっと無念のうちに死んでいったに違いない叔父やずっと私を慈しみ育ててくれた母のためにも、今、道を間違えることは決してすまいと思っている。

まともに読みもしないで、押しつけだから変えた方が良くなどと言われている憲法の前文には、

「日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたつて自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、

ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。」

多くの国民の血と悲しみを心にとめて「政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意」したことを忘れ、政府による解釈の変更で、再び戦争の惨禍が起こる道を開くことを、私は決して許さない。

ささやかではあるが、私の決意である。